

# 岩と雪

133

THE IWA TO YUKI  
Apr., 1989



ワイルド・ロックス

フォンテーヌブローのボルダー・サーキット

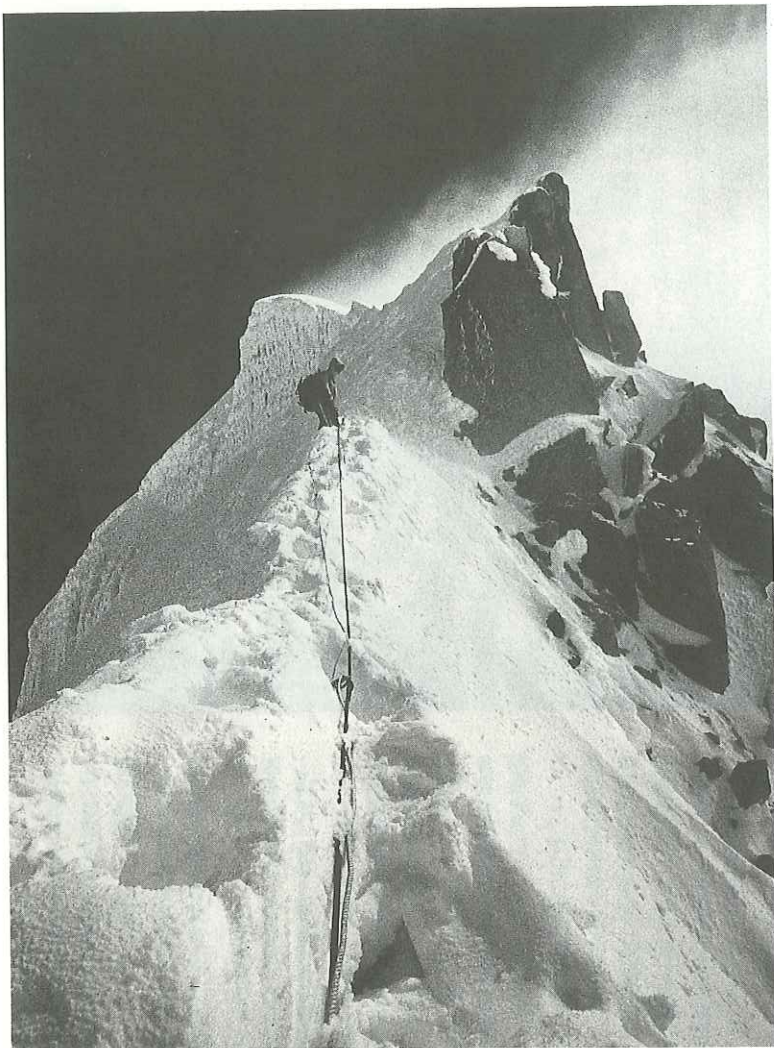
鈴木英貴インタビュー

## CHINA

### 四川省の聖なる山 チェルー山初登頂 神戸大中国地質大合同登山隊の記録

中国・チベット自治区東部、四川省南西部、雲南省西部と北西部にまたがる横断山脈。高黎貢山、怒山、雲嶺、沙魯里山、大雪山などの山脈

を含み、これらが並行して北から南へ連なる。切り立つ山、深い谷が東西の交通を妨げているところから横断山脈の名がある。各山脈間を怒江、



チェルー山頂のナイフエッジを行く  
Climbing on knife-edged summit ridge of Queer (6164 m).

瀾滄江、金沙江、雅礱江が流れ、山上からこれらの川床までの高度差は一〇〇〇〜三〇〇〇に達し、世界でもまれな高山峡谷地帯をなしている。

四川省には、横断山脈最高峰のミニヤ・コンカ(七五五四)のほか、スークウニャン山(六三二〇)、ゲニ峰(六二四〇)などの名峰があり、すでに登られている。しかしチ

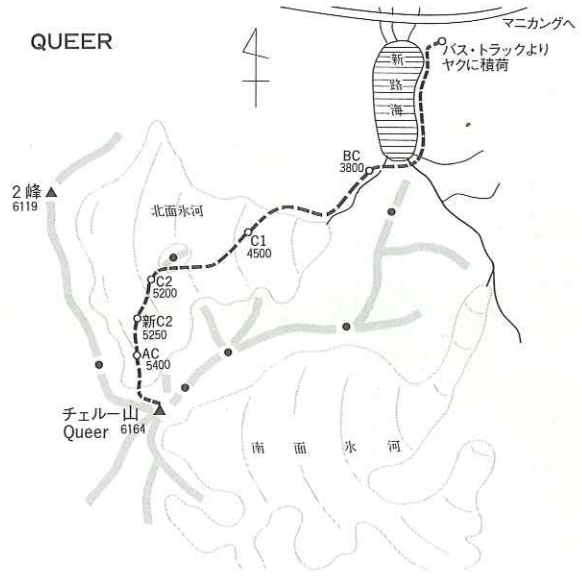
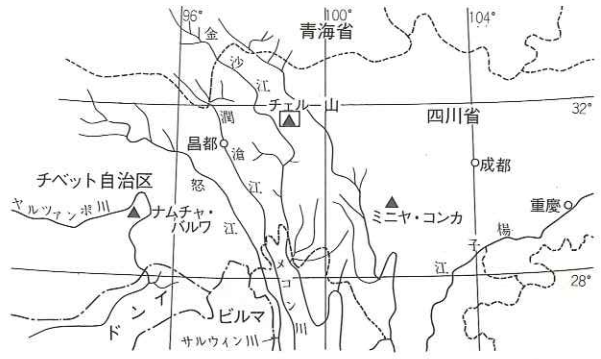
ベット語で「聖なる山」の意味であるチェルー山は、金沙江上流の沙魯里山系に位置し、一九六二年に北京地質大学(中国地質大学)武漢の前身が岩壁帯に阻まれ断念して以来、長い間静寂を保っていた。

神戸大学山岳部は、一九八六年、チベット東南部のクラー・カンリ峰(七五五四)に初登頂した。その時に中国地質大学の学生が参加・協力してくれた。それを契機に両大学間で学生レベルの日中合同登山を行うことに合意した。そして第一回の合同登山を、中国地質大学として以前失敗しているチェルー山(六一六四)で行なうこととなった。

まず、山域が未知であるために、先遣隊を一九八八年春に送りだした。チェルー山は北面と南面に氷河を擁する。南面氷河には舌端に絶悪なアイス・フォールがある。一方北面氷河は全体的になだらかだ。偵察行動は北面に絞られたが、登山期間の少なさと複雑な地形のために頂上が見えず、全体のルートも決定することができなかった。とくに頂上稜線へのルートは、未解決のまま同年9月の本隊に残された。

\*

9月11日。チベットと四川を結ぶ川藏公路の村、馬尼干戈をバスで出発。いつもは陽気な両国の隊員達も



今日は心なしか静かである。一時間ほど草原のゆるやかな谷間を行くと突然、山頂を岩間に隠した、周りよりひととき大きい山があらわれた。チユルー山だ。北面水河が見える。やがて我々を乗せたバスは新路海に到着した。そこで待ち受けていたくれたのはチベット人とヤク二十七頭であった。子供もたくさんいる。どうやら初めて見る外国人らしい。彼ら独得のバター臭い。改めて「チベットに来たんだ」と、実感した。

この夏は世界的な異常気象のためか、ここまで道路が各所で寸断され、アプローチに無駄な時間を費やして

いる。今回の合同登山の下山は9月28日。実質的な登山活動は一六日間しかない。この限られた期間で日中両隊とも全員登頂をするのが、今回の最終的な目標である。

\* B Cはそこから三時間ほどである。新路海ぞいに行くと、やがて草原となる。青い小さな花が一面に咲いている。B C (三八〇〇) は北面水河舌端の河原に設けた。林立するヒマラヤ杉は美しい景観を提供してくれるが、同時に降水量が多いことをも教えてくれる。加えて異常気象だ。山は春とは様相を変えている。

水河上に出るには水河右の岩壁帯にルートをとらなければならないだろう。登攀のことを考えると、ガゼン闘志が湧いてくる。

翌12日は雨となった。この日は高度順化を兼ねて四一五〇が付近まで荷上げである。ここをABCとし、隊荷の集結地とする。

13日。船原、川端、馬、張(志)の四人で岩壁帯突破を試みる。中国に来て初めて見る晴天が頼もしい。しかし、水河で磨かれたスラブはかなりのバランスを要する。重い荷物を背負った荷上げでは無理ではないだろうか。そんなことを考え出したころ、トップを行く川端が六〜七メートルの上を滑り落ちた。フレンドNo.3で止まり、幸い怪我はない。結局スラブ上にルートをとるのは無理と判断。もう一度ルート再考を強いられる。

14日。船原、川端は水河下部の緩やかな斜面で中国隊員のため、臨時氷雪技術教室を開講した。メニューは基本的なアイゼン技術から確保技術まで。某国顔負けの「つめこみ」教育だが、頂上に登るためにはぜひともマスターしてもらわなければならない。中国隊員も真剣そのものである。

一方、北口、武智、竹内、杉本は岩壁帯右端のルンゼを偵察に行く。

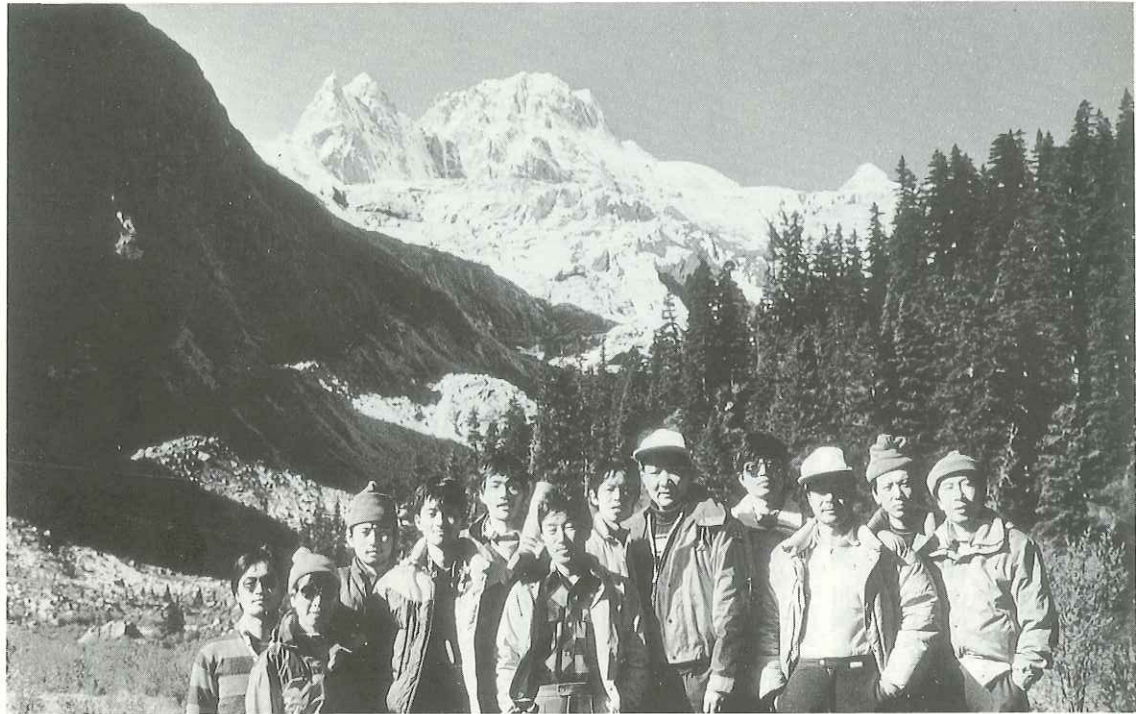
登山活動初日には滝のように水が流れていたところだ。しかし、ここ数日の晴天で水量は激減し、右岸のバンド状の側壁にIII級程度のルートを見つけた。さらに登り右ヘトラヴァアースすると、草付のガレ場となり直上。左上する広いルンゼを詰めると水河上に出られそう。その日のうちに固定ロープを四ピッチ張り終え、帰幕する。

ルートが水河上まで延びた。この知らせは若干焦り出した隊員達を喜ばせた。一歩でも頂上に近づくことが、最高のカンフル剤となるのだ。

翌15日は、ほとんどの者が休養。劉の六人が水河上のC1予定地まで幕営用具を荷上げする。ここまで隊員は竹内や張(軍)を除き、かなりうまく高度に順応している。竹内からも慣れたのか徐々に調子を上げていく。焦ってはいけない。あと二日間うちに回復すればよいのだ。

16日。C1 (四五〇〇) 入りは荷上げ隊とはほとんど同時であった。広大な水河。積み重なる岩壁。頂上稜線へと続く白いライン。プラトーの中にポツカリ浮かぶ岩塊(我々はこれを『浮島』と呼んでいた)。全てが我々の挑戦を待ち受けているかのよう。しかし、ここからも頂上は見えない。頂上稜線へ続く支尾根に

BCでの記念撮影 後方にチェル―北面氷河舌端が見える At the BC, below the North Face of Queer.



ダイレクトに突き上げるアイス・フオールが正面に見える。弱点をつければルートになるかもしれない。

C1に残りたい気持ちを抑えて荷上げ隊がBCへ向かった。残ったのは船原、川端、董、馬の四人である。一緒に晩飯のカレーを作りながら、チェル―山以後どんな山に登りたいかなどをしゃべる。コミュニケーションは片言の中国語と英語と、そして身振り手振り。馬は七〇〇級級の山、船原は南極へ行きたい等々。中国隊員とは基本的に生活習慣の違いはあるが、やはり同じ若者である。お互いに夢を素直に語れるのがうれしかった。

ここしばらく晴天が続いているが、横断山脈の北の北の北の北にもポスト・モンズンがやって来たのだろうか。頼むからこのまま晴天よ続けてくれ。天候はもたなかった。夜半から急に天候が悪化。雷を伴って雪が降ってきた。氷河はうっすらと雪化粧して美しいが、上部はガスが出て視界は悪い。なんとなく重い気分。プラトールを行く。クレヴァスがいきたるところに口をあけており、右に左にルートをとる。正面のアイス・フォールに取付く。ひざ下までのラッセルに苦しめられ、最後にはクレヴァスに阻まれる。これを抜ければ頂上はすぐなのだが……。

翌18日には前日C1入りした武智と堀が代わってルートの偵察に出た。スピーディーに行動するには、どうしても日本人だけの行動となってしまふ。正面のアイス・フォールはやはり上部で行きづまり、「浮島」左のアイス・フォールに転進しようだ。

「なんとか行けるんちやいますかあ」16時の交信で彼らはこう答えた。その声には「これ以上動きたくない」の意がありあり。それでも北口は「すみやかに行動して完全にルートを選んで下さい」と非情な言葉。「すみやかかー？」と、トランシーバーの向うからは怒りともあきらめともつかぬ言葉が聞こえた。北口隊長はというと、悠然たるものでニヤリと笑っただけだった。

武智と堀がC1に帰幕したのは18時過ぎだった。一カ所不安定なクレヴァス帯があり、そこをダブル・アップスで直上後トラヴァースすると「浮島」の上に出るようだ。満足気な北口が、「苦勞」と労をねぎらうと彼らは笑って答え、早々に重い体を寝袋に入れた。

このところ朝のうちガスが出て、昼から時折晴れ間がのぞく天気が続く。翌19日もそうだった天気であった。C2へのルートワークと荷上げが同時に始まった。重荷とガスでなかなかルートワークはかどらない。九

アプローチに無駄な時間を費やして

だ。山は春とは様相を変えている。

岩壁帯右端のルンゼを偵察に行く。

見えない。頂上稜線へ続く支尾根に

頂上での隊員たち On the summit, Sep. 24, 1988.



アスが潜んでいるのだ。

21日。C2を五二五〇メートルまで上げ、上部雪壁を一カ所フィックス。明日いよいよアタックをかける。雪壁の上はなだらかな尾根が続く。よし、これなら行けそう

だ。しかし残念ながら翌日はブリザードのため沈黙。雪壁下まで昼からトレイルをつけに行く。

23日。テントから顔を出すと満天の星。アタック日和だ。6時に出発する。アタック隊

時間の行動で、やつとアイス・フォール上に出た。この日のうちに北口、竹内、杉本、馬、董、孟の六人がC2(五二〇〇)入りした。19時過ぎの交信で「ピークが見えます」とのこと。いよいよだ。

20日。杉本がヒドン・クレヴァースに転落。幸い彼女は無事だった。油断できない。いたるところにクレヴ

員は船原、武智、堀、川端、董、馬張(軍)、孟の八人である。ヘッドランプの灯を頼りに昨日のトレイルをたどる。雪壁下で夜明けとなる。雪壁を二五〇メートル・アックスで直上する。途端にひざ下までのラッセルが始まる。ザイルを結びあって交代でラッセルする。初めは皆元気がだったが、徐々に疲れてくる。おまけに風

とガスが出てきた。それでも頂上西のコルに着いた。ところがどうだろう、丸い頂きに見えていた頂上は両側がスパッと切れ落ちたナイフエッジとなっていてはいないか。疲れている身体にムチ打ってフィックス工作に移る。ガスはひどくなる一方である。トップに行く川端がみる間に白いペールに包まれた。そのうち風も強まる。二ピッチ工作する。時計の針は4時を回った。ルート工作を待つ中国人は寒さで疲労が激しい。残念だが引き返さざるを得ない。あと一〇〇メートルを残して。

\* B C撤収は一日繰り上がって27日に決まっている。なんとかあと二日で決着をつけなければならぬ。力をふりしぼって最後の攻撃をせねばならない。

急遽、C2から雪壁上(五四〇〇)にテント二張と一日分の食糧を上げた。テントの収容人数はせいぜい一〇人だ。しかし、今日のアタック隊員とC2から上がってきた隊員を合わせると一四人。折り重なるようにして一夜を明かす。外は相変わらず風が吹き荒れている。

24日。明るくなった7時ごろ、幾分ガスと風が弱まる。北口、船原、竹内、杉本、董、張(志)、張(偉)、鄭の八人がアタックに向かう。トレ

イルはわかるが、やはりラッセルとなる。ガスと風も弱まり10時にコルに着いた。船原と竹内がナイフエッジにルートを延ばす。12時50分、二ピッチフィックスした終了点が頂上であった。八人全員が頂上に立った。続いてこの日のうちに川端、馬、孟、張(軍)もアタックに成功。眼下のチベット高原は青く、どこまでも続いている。最高の気分だ。

\* 翌日、武智、堀の二人もアタック成功。残念ながら中国隊は全員登頂できなかったが、大した事故もなく無事登山活動を終えた。B Cに下りると、もうすでに秋の気配がした。

\* このようにして、中国を舞台にした合同登山は終わった。一九八九年には舞台を日本に移して、技術修得を主に合同登山を行なう。文化や習慣の違いが、登山をおおして本当に友好的な交流ができたと思う。

(川端充・記)

■神戸大学 II 中国地質大学(武漢合同登山隊 名誉隊長 II 楊巍然 57、平井一正(56) 総隊長 II 胡燕生 52) 神戸大隊長 II 北口博教(43) 同隊員 II 船原高武(27)、川端充(22)、竹内鉄二(21)、武智大介(21)、堀洋(22)、杉本直子(21) 中国地質大隊長 II 朱發榮(53) 同隊員 II 孟憲国(26)、董范(27)、劉亜非(32)、張志堅(25)、馬新祥(25)、張偉(23)、張軍(30)、鄭超(30)、曹文華(21)